

ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル No. 46

2007 (平成19) 年1月25日

No. 46

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)
共生社会の実現を願う妖精「インクル」 「包括的教育理念」を意味する英語「インクルーシオン」から名付けました

目次 / contents

- <2007年年頭ご挨拶>
「さりげなさ」の深化と国際展開が新たな課題 (鴨志田厚子)..... 2
- 「公共トイレの操作部」と「触知案内図」のJIS制定へ
「高齢者・障害者配慮設計指針」、24規格に (戸村哲次郎、和田勉)..... 3
- <フィンランド・スペイン視察報告>
障害者への配慮と「もてなしの心」が行き届いた最新施設 (金丸淳子・水野由紀子)..... 6
- 日韓で、学生によるUDコンペ開催 (鳥居恭宜、星川安之)..... 8
- <この業界・この団体> (社)全国脊髄損傷者連合会
「インターネット版宿泊ガイド」の運用開始 (高嶋健夫)..... 10
- <随想 私と共用品>第25回
「男坂」「女坂」に見る、わが国バリアフリーの伝統 (岩佐徳太郎)..... 11
- <ニュース&トピックス>
コクヨが平成18年度バリアフリー化推進功労者表彰 (渡辺文字) / 「次世代福祉・生活支援コーディネータ研修会」開催 (高嶋健夫) / 「第4回アクセシブルデザイン・フォーラム」開催 (高嶋健夫) / ライオンが「さわってわかる歯みがきの本・歯周病編」を発行 (高嶋健夫)..... 12
- <キーワードで考える共用品講座> 第45講
「共用品の普及と新聞報道」(後藤芳一)..... 14
- <事務局長だより>2007年は「再発進の年」に！ (星川安之)
共用品通信..... 15
- <わが社のエース> (株)サンエ芸「トイレ用点字案内板」
指に優しいプレス一体加工の点字表示 (高嶋健夫)
奥付..... 16



■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T0103)」に記載されている絵記号例。左から「雪」「寒い」「消防車」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

<2007年年頭ご挨拶>

「さりげなさ」の深化と国際展開が新たな課題

財共用品推進機構理事長 鴨志田厚子

2007年、明けましておめでとうございます。昨年中は共用品推進機構の活動に多大なご支援・ご協力を賜り、有難うございました。厚く御礼申し上げます。

おかげ様で、バリアフリー、ユニバーサルデザイン、アクセシブルデザインなどの意識は大分、社会に浸透してきました。今年も当機構ではさまざまな事業の計画がありますので、皆様にご期待いただけることと存じます。

ここ数年、製品やサービスに対する配慮点などの国際化、規格化の方向で展開が続き、幅広く実績が得られてきました。

事業全体の中でも、不便さ調査は当機構の前身であるE&Cプロジェクトの時代(1991~99年)から実施し、機構の発足時より継続している基盤事業です。(株)日本点字図書館のご協力の下、意識が高い多岐にわたる有志メンバーが分担して、対象の方々を訪問し長時間にわたる面接取材をさせていただいた膨大なレポートは圧巻でありました。

当時の社会に優しい風を送り込もうと純粋な16人のメンバーの意欲は、大きなエネルギーとなって現在に引き継がれていると、改めて思い起こされます。私も参加者の1人でしたが、不便をされている方々の実態に接し、まさに目から鱗。知っているつもりで半端な知識に深く反省させられました。あれから10年以上を経た今日、モノの分野では気配り製品が市場に増えており、嬉しい限りです。

しかし、不便さの状態や項目は、時代と共に変化しつつあるのではないのでしょうか。変化の実態をしっかりと踏まえていなければ、「意味なしデータ」になってしまいかねません。いずれにしても、不便さ調査系の事業はさまざまな知識が得られ、新しい知恵を生む永久的事業でありたいと考えます。

折しも、今年は問題の年、2007年です。団塊世代の大量退職があり、従来の物差しでは測れない状況が発生しそうです。この新熟年の方々は、おしゃれで、開放された自由さと個性を發揮されるとお見受けしました。「まだ若い！手助けは無用！」と言われるでしょう。元気は大事、そうであって欲しいところですが、気付かぬうちに身近なバリアが迫ってくる年代でもあります。

共用品・共用サービスには「さりげなく」というキーワードがあります。この「さりげなく」の深化の研究が今後の課題であろうと気付かされます。アクセシブルデザインも「使い勝手」という物理的な面だけでなく、精神面への配慮が重要なポイントになるのではないのでしょうか。難しいことですが、時代の流れ、クリアしなければなりません。

一方、国際関係では、国際標準化機構(ISO)の会議で議長を務めてくださった当機構理事の菊地眞・防衛医科大学校教授ら関係者の皆様方のご尽力のおかげがあり、海外諸国への扉が開きました。

そして、事務局スタッフの頑張りによって、アジアの近隣諸国・地域である中国、韓国、台湾などとの交流・協力体制を構築しようとの仕事も動き始めています。

各国の文化の共通性と個別性を理解し合った、よきネットワークができることを新年の新しい目標に加えたいと思います。

どうぞ今年も変わらずご協力くださいますようお願いいたします。



「公共トイレの操作部」と「触知案内図」のJIS制定へ 「高齢者・障害者配慮設計指針」、24規格に

日本工業規格(JIS)の「高齢者・障害者配慮設計指針」シリーズに、新たに2つの規格が加わる。「公共トイレにおける便房内操作部の形状、色、配置及び器具の配置」(JIS S 0026)と「触知案内図の情報内容及び形状並びにその表示方法」(JIS T 0922)で、いずれも財共用品推進機構が原案作成団体となって検討作業を進めていたもの。昨年11月に日本工業標準調査会(JISC)の標準部会高齢者・障害者支援委員会で承認され、2006年度内に正式に発行される。これにより、同シリーズのJISは24規格となる。そこで、これら2つの新JIS作成に関わったTOTO(東陶機器株)UD企画部の戸村哲次郎氏と、(株)日本点字図書館点字製作課の和田勉氏に寄稿を依頼し、それぞれのJISの概要と策定に至る経緯などについて報告してもらった。

<公共トイレの操作部・器具>…………… 3つの設備の壁面配置をルール化

最近、公共(パブリック)トイレは、車いす使用者も利用できる多目的トイレの普及や設備の多様化・高機能化などずいぶん進化してきましたが、それに伴って新たな問題も生まれてきています。その1つが「大便器まわり操作系設備の多様化による利用者の混乱」です。

公共トイレは、利用者1人ひとりにとっては初めてそのトイレを利用する場合も多く、「トイレの流し方がわからなくて困った」「呼び出しボタンを便器洗浄ボタンと間違えて押ししまい、係員が飛んできて恥ずかしい思いをした」などという経験のある人が数多くいらっしゃいます。これは、視覚に障害のある人やお年寄り、子供はもちろん、公共トイレを利用するすべての人に共通の問題です。

視覚障害者がトイレで困っていること

視覚に障害のある方がトイレに関して困っていることは、

- ①デパートや駅などでトイレの場所がわからない
- ②トイレの左右どちらが男女かわからない
- ③トイレの中で大便器ブースや小便器の場所がわからない
- ④大便器ブース内の操作方法がわからない

③トイレの中で大便器ブースや小便器の場所がわからない

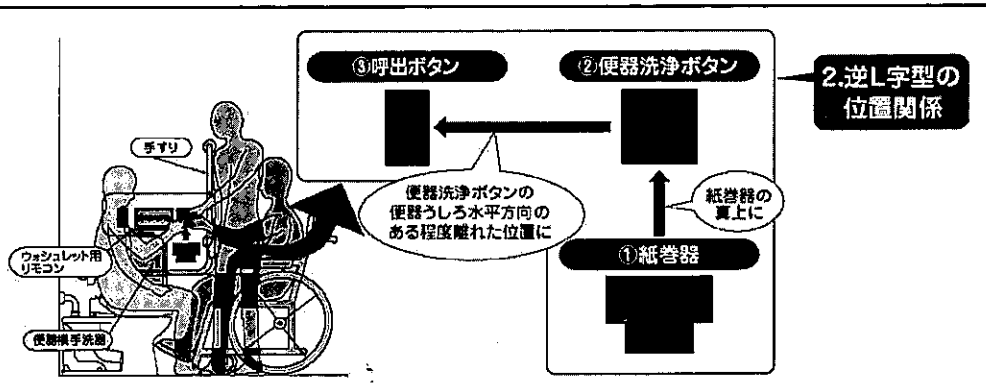
④大便器ブース内の操作方法がわからない

——など、いろいろあります。

その中でも、「大便器ブースの中に入ってしまうと誰にも聞くことができない」という状況を考慮して、まずはトイレを使用するうえで最低不可欠で重要な3つの設備である「紙巻き器」「便器洗浄ボタン」「呼び出しボタン」の配置ルール化を実現するために、「大便器まわりの操作系設備の配置の標準化」を取り上げ、TOTOでは東洋大学ライフデザイン学部の高橋儀平教授との共同研究を進め、共用品推進機構の協力の下に関連業界を巻き込んで、このたびようやくJISとして制定される運びとなりました。



■モニターによる配置の検証風景



■公共トイレの操作部の配置ルール

1人でも多くの人に喜んでいただける、人に優しい標準化を目指しているいろいろな障害のある方にご協力いただいて評価・検証を重ねました。具体的には、東京、名古屋、金沢、北九州の4カ所に評価検証キットを持ち込んで、脊髄損傷、筋ジストロフィー、関節リウマチ、脳性マヒ、脳血管障害、視覚障害（全盲・弱視）と、約100名もの障害者の方々にご協力いただき検証を行いました。

紙巻き器を基点に「逆L字型」に配置

大便器の洗浄操作ひとつとっても「便座に座って」「立った状態で」「車いすに座ったまま」と3つの姿勢で使いやすい必要があります。非常ボタンの位置も間違えて押ししまわらない位置で、なおかつ、いざという時は押しやすい必要があります、紙巻き器の位置と併せてなかなか難しい課題です。

また、いろいろな障害によって「手が届く／届かない」「押しやすい／押せる／押せない」「探せる／探せない」など、評価がさまざまに難航しました。だが、評価検証を重ねた結果、ようやく3つの設備を「使える配置」として1つの案に固めることができました。それが、今回JISになった「操作系設備の壁面配置の共通ルール」で、次の3つのルールから成っています。

<ルール1> 便器左右どちらかの壁面にまとめて配置する。

<ルール2> 紙巻き器の上に便器洗浄ボタンを配置する。

<ルール3> 呼び出しボタンは、便器洗浄ボタンと同じ高さの後方へ配置し、3つの設備が「逆L字型」の位置関係になるようにする。

今回のJIS制定は、こうした共通ルールの浸透に向けた第一

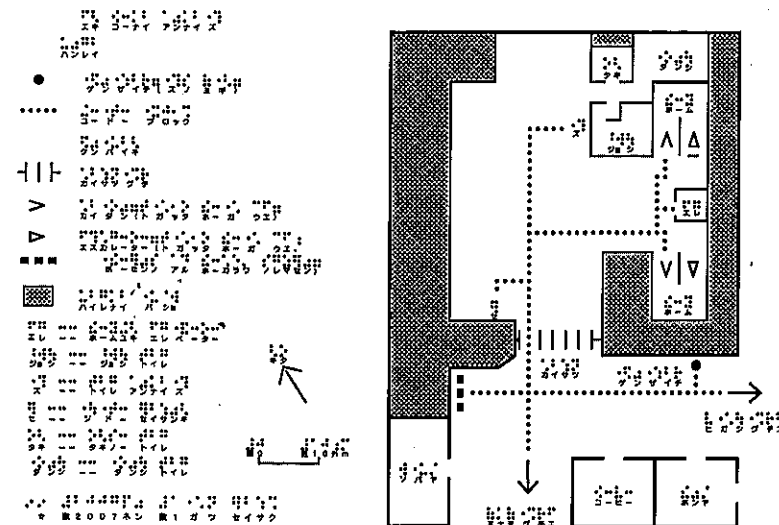
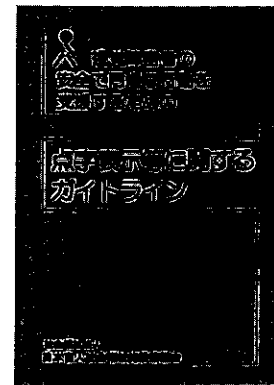
歩です。今後は国や自治体などへの働きかけを強めて、公共トイレにおける操作部の配置ルールを広く普及させ、「どこのトイレに行っても設備の配置が同じでわかりやすい」というやさしい社会の実現に貢献したいと思います。（戸村哲次郎）

<触知案内図>..... 公共案内図の形状・表示などをルール化

日本盲人社会福祉施設協議会・点字出版部会点字サインワーキンググループの一員として『点字表示等に関するガイドライン』をまとめたのが2002年の初夏のこと。幸い、各方面から好評をもって迎えていただけたことは、およそ2年間の苦勞が報われる思いでした。触知案内図のJISはこの『ガイドライン』を元に作られたわけですが、共用品推進機構の星川安之専務からJIS化の話をお聞きしたのは、早くも同年秋のことでした。

今にして思えば、JIS化に向けた審議がこれほど素早く進んだことは、大変な幸運に恵まれた結果と言えるでしょうけれど、当時は、有り難さよりも戸惑いを強く感じたものです。それは、私たちの『ガイドライン』をベースとしつつも、その内容を「点字表示」と「触知案内図」に分けて、2つのJISを作ろうという動きに対して感じたことでした。というのも、『ガイドライン』には「触知案内図」に関する記述が少なく、既存の資料も乏しかったことから、どんな規格になるかの想像がつかなかったことと、やるとなれば相当な作業量を覚悟する必要があったからです。

■「点字表示等に関するガイドライン」の表紙（左）と触知案内図の例



触知案内図の増加、表示法の混乱に対応

翌2003年、2つのJIS原案作成委員会がスタートしましたが、「点字表示」の審議期間が2年なのに対し「触知案内図」の審議期間を3年としたのは、そうした困難さを予測してのことだったでしょう。

それでも、触知案内図標準化の必要性は年々高まりつつあります。バリアフリー関連法令の施行などの影響により、多くの施設・設備で触る案内図の設置が不可欠の基準となり、点字や触知の特性に不慣れな製作者の参入が相次いでいること、ある場所だけで通ずる表示法、ある製作者だけの決め事といったローカルルールが増えていることなどが、触る図の効率的な理解を妨げる要因になっていると考えられるからです。

そもそも、図というのは、見える者にとっては「ぱっと見て、一目で全体が理解できること」が大きな利点です。ところが、触る図では、たとえば、指の腹の大きさぐらゐの覗き穴を上下左右に動かすようなやり方でしか全体像を探ることができません。つまり、視覚的な図が持っている「全体像の瞬間的な把握」という利点が欠落しているのです。

表題・解説文・凡例・図形の4要素で規定

このため、触る図を効率よく理解するためには表示法が一定の規則に従っていることが

望ましく、そのために標準化は効果的な手段と考えられます。実際、審議期間中にも、この規格の発行には多くの利用者・製作者からの期待が寄せられました。ただし、図や地図にはさまざまな種類・形態があり、そのすべてに適用させるのは無理があることから、この規格では、主に公共の建物や駅施設、駅前広場、公園、テーマパークなどの「案内図」を対象を絞りました。

また、一目で全体像がわからない触知案内図では、「言葉による案内」で図の概要を知らせることも重要です。そこで、本規格では「触知案内図」を図形だけのものとせず、「表題」「解説文」「凡例」「触知図形」の4要素で成り立つものとして規定しました。

3年間の審議期間のうち、触知記号の選定は大きな仕事となりましたが、実際には「附属書（参考）」となりました。全く新しい規格を世に問うわけですから、厳しく規定するよりも、普及を願って「望ましい」「原則とする」といった表現を多用した結果と言えます。同時に、5年ごとの見直しでさらに適切な規格に育っていくことを期待しています。

最後になりますが、自分のキャリアの中でも特筆すべきプロジェクトに関われたことは望外の幸せでした。また、当初、戸惑いを覚えたものの、今となっては「これしかない」という思いを抱ける内容となり、星川専務の慧眼に改めて敬服する次第です。（和田勉）

<フィンランド・スペイン視察報告> 障害者への配慮と“もてなしの心”が行き届いた最新施設

（財）共用品推進機構の今年度事業である国際障害者団体への調査の一環として、昨年10月23～27日、フィンランド・ヘルシンキとスペイン・マドリッドの障害者団体を訪問した。その際に、両都市にあるいくつかの障害者関連施設を見学した。ここでは、その中の2つの施設の概要を写真とともに紹介しよう。

（金丸 淳子・水野由紀子）

【視覚障害者総合センター（IIRIS Centre）】 配慮とデザイン性を両立させた館内設備

ヘルシンキにあるこの施設は、2004年に設立された視覚障害者のための総合施設。近代的な外観の建物でありながら、中に入るととても温かい雰囲気、スタッフの方々も親切に案内して下さった。

建物は6階からなり、弱視や全盲、盲ろうの人が、調理などの生活訓練やリハビリテーション、パソコン研修のために訪れる。

館内への入口は3階にあり、入ってすぐのところに各階ごとの触知案内図が設置されていた。制作したのは日本人の齊藤名穂氏。完成まで1年を費やしたそうだ。

この触知案内図は、まるでアートのように自由にデザインされている。線や点ばかりではなく、喫茶室はレース模様、パソコン研修

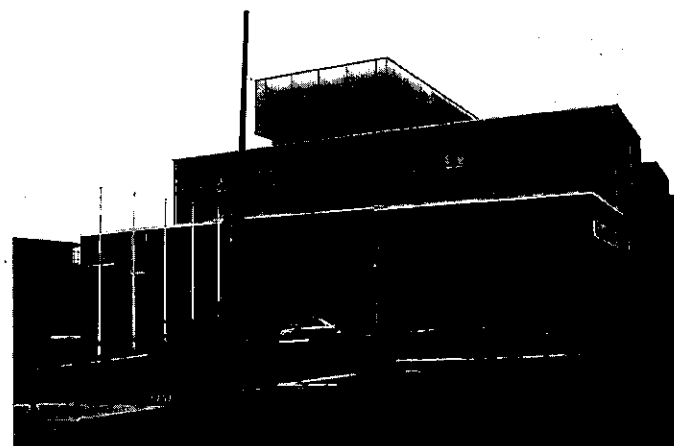
の部屋はキーボードをイメージさせる形で、触れることはもちろん、目で見ても楽しめるデザインだ。

また、廊下には観葉植物など通行を妨げるものは一切置かず、車いす同士がすれ違ってもまだ余りある広さを確保している。中央部分は床の材質や色を変えていて、白杖を持った人が歩きやすいようにしている。

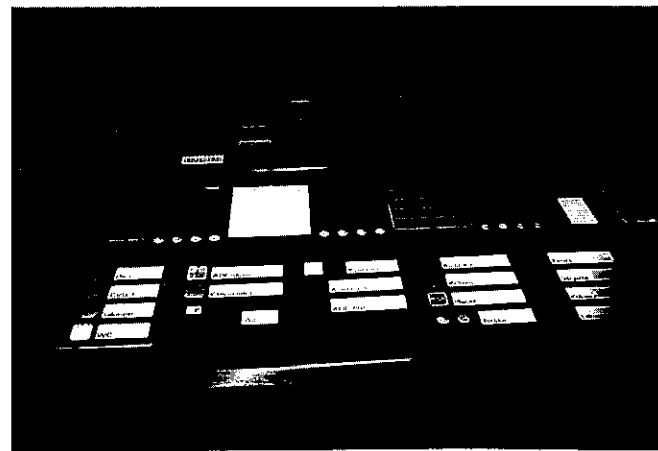
館内は弱視の人にも見やすい照明が採り入れられ、扉やいすの色は紺、床はクリーム色に近い木目調と、見やすい色のコントラストが施されている。全体に機能的でありながらデザイン性にも優れている点は、北欧の文化の表れといえるかもしれない。

【オンセ触れる美術館（ONCE-Tiflogico Museum）】 手と指で楽しめる“世界の名所巡り”

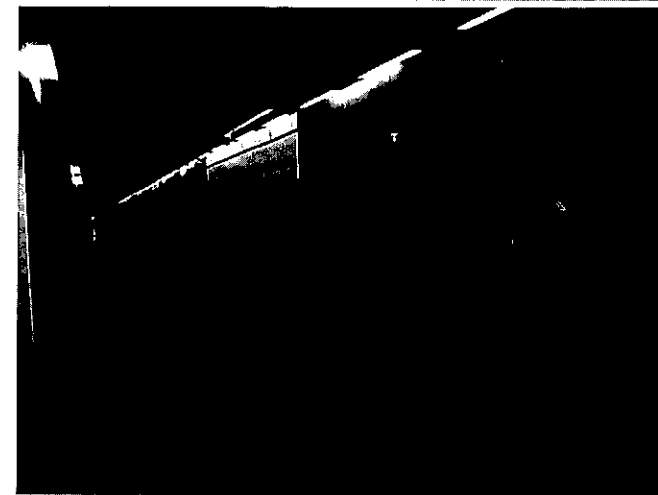
スペインの街中を歩いていると、あちこちの通りの脇に「ONCE（オンセ）」と書かれたスタンドが立っているのが目に入る。これは宝くじの販売所で、スペインの宝くじ事業は「オンセ」という団体を取り仕切っている。もともとは視覚障害者のための団体として生まれたが、現在は視覚障害以外の障害者のためにも活動しており、障害者全般の雇用促進にも努めているという。



■近代的な視覚障害者総合センターの外観



■同センターの3階を表示した触知案内図



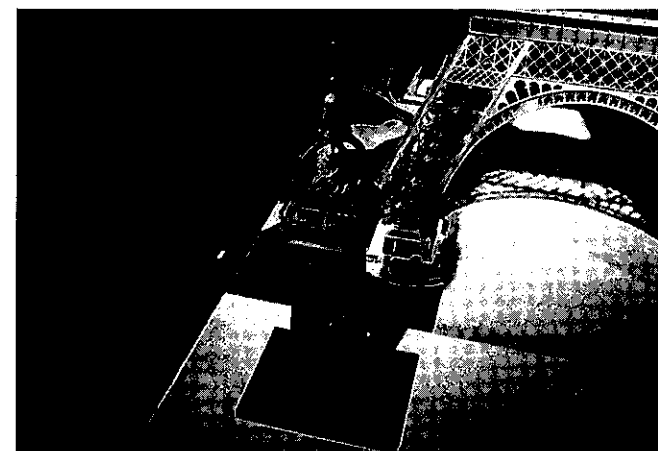
■IIRISセンターのバリアのない、広々とした廊下

このオンセは1992年、マドリッド市内に展示物を自由に触れる美術館を設立した。スペイン・グラナダ市にあるアルハンブラ宮殿をはじめ、ピラミッド、エッフェル塔、タージマハルなど、誰もが知っている世界各国の名所・旧跡がミニチュアで展示がされている。

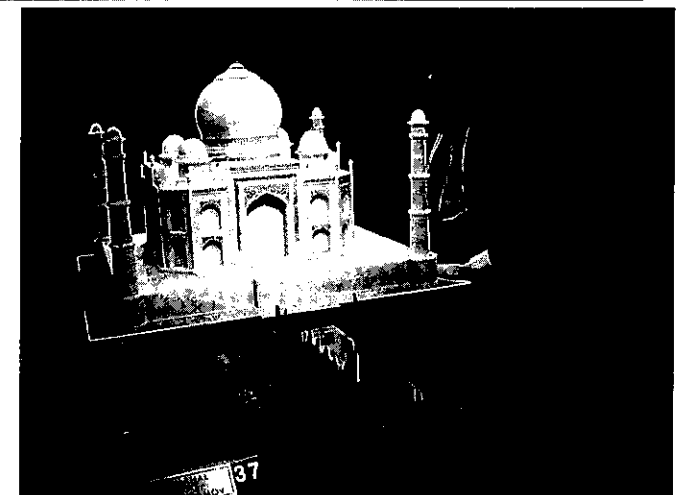
すべてのミニチュアは、砂や大理石など本物と同じ素材で作られており、細部まで忠実に再現されていた。エッフェル塔の頂上部分は、手が届くように塔の下に置かれている。

私たちが館内を見学している間も、学校の授業だろうか、小学生くらいの子供たちが引率者に連れられて、楽しそうに展示物に触れたり、のぞき込んだりしていた。

このほか、むかし使われていた点字作成機器が時代順に並べられ、点字作成の変遷がわかり、とても興味深かった。また、視覚障害者の方が作った彫刻や絵画などの美術品も展示されていた。



■直接触れるように、塔の下に置かれたエッフェル塔の先端部分



■オンセ「触れる美術館」にあるタージマハルの模型

訪問先での温かいもてなしに感謝！

私たちが訪れた時、フィンランドはちょうど季節が秋から冬へと変わる時期で、天気は曇りがちだった。そんな景色とは対照的に、訪問先での温かいもてなしは、私たちの心を和ませてくれた。忙しい時間を割いて案内して下さったスタッフの方々に感謝したい。

一方のスペインは、各団体の方々の明るさとおしゃべり好きなのが印象的だった。

国際障害者団体への調査事業は来年度も継続して行っていく予定であり、今後も障害者団体以外の関連施設にも積極的に足を運んで、海外の最新事情を吸収していきたいと考えている。

■IIRIS Centre <http://www.nkl.fi/iiris/english.htm>

ONCE - Tiflogico Museum

<http://museo.once.es/eng/map.htm>



■目の不自由な人が作った彫刻。後ろの絵画も視覚障害者の作品だ。

<日韓で、学生によるUDコンペ開催> 新鮮な発想と若い感性が光る力作揃い!

日本と韓国で大学生や高校生を対象にした共用品・ユニバーサルデザインのアイデアコンテストが相次いで開催された。いずれも、若い柔軟な発想と感性を生かした力作が集まっようだ。日本福祉大学の「福祉機器アイデアコンテスト」の概要を同大情報社会学部事務室・鳥居恭宜さんに、韓国のコンペの様相を審査員として参加した星川安之専務理事にそれぞれ報告してもらった。

日本福祉大「福祉機器アイデアコンテスト」 移動の楽しさ、暮らしやすさを競う

日本福祉大学は1953年にわが国初の福祉系4年制大学として発足し、現在では大学院と4学部、通信教育部に約1万2000名の学生が在籍しています。

「福祉機器アイデアコンテスト」は、2004年、情報社会学部に人間福祉情報学科と生活環境情報学科の2学科を設置し、日本福祉大学福祉テクノロジーセンターを開設して情報技術や生活支援領域における高齢者・障害者支援に関する研究、教育、社会実践を展開していく中でスタートしました。経済産業省、

愛知県・岐阜県・三重県・名古屋市の各教育委員会、(財)共用品推進機構、日本弁理士会東海支部が後援団体となり、専門的な視点からコンテストに対する助言、指導を受けています。さらに2006年度はアイシン精機、ヤマシタコーポレーション、名古屋鉄道、JTB中部、富士通、中日新聞社の各社の協力も得て、産官学連携で取り組んでいます。

応募総数は合計502点に!

今年で3回目となるこのコンテストは、柔軟な発想に富む高校生の皆さんに、福祉機器・福祉用具、ユニバーサルデザイン、身体機能の低下や障害に配慮したサービス、他を考える機会を提供し、福祉機器に対する関心を高めていただくことを目的としています。

今年度も昨年までと同様、特定課題と自由課題の2領域を設定し、アイデアを募集しました。特定課題は「すべての人に“移動”の楽しさを!」とし、好きな時に、好きな場所へ自由に移動するのを手助けする道具・システムに関する作品を受け付けました。自由課題は「高齢者、障害者、妊婦、幼児など、誰もが快適に暮らせるための“もの”や“サー

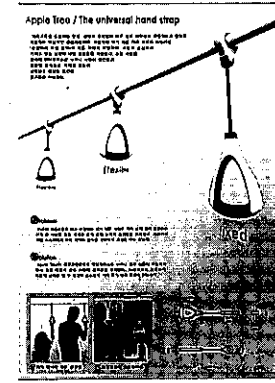
■自由課題：誰もが快適に暮らせるための「もの」や「サービス」の工夫

- ▽最優秀賞
「簡単ボタン」
= 久野智世・愛知県立鶴城丘高校2年
- ▽優秀賞
「両面らくらくリモコン」
= 竹内俊晃・北陸高校3年
「掃除機倒れんローラー」
= 長田光里・愛知県立碧南工業高校2年
- ▽特別賞
「食べやすい!!『ミニたら団子』」
= 河合佑麻・愛知県立半田農業高校3年

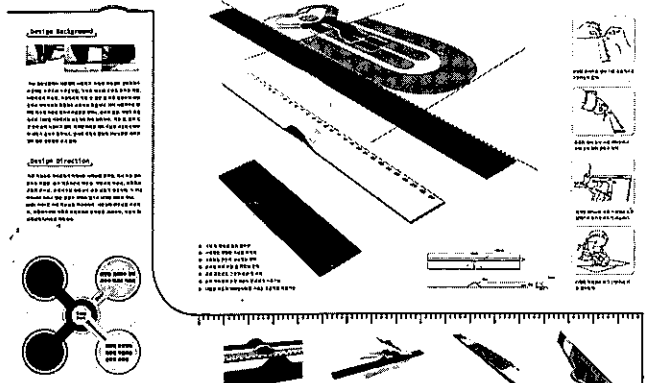
■特定課題：すべての人に“移動”の楽しさを!

- ▽最優秀賞
「どこでもMAP配信サービス」
= 加藤あゆみ・日本福祉大学付属高校3年
- ▽優秀賞
「他車の警報音を振動化し、運転手に伝えるシステム」= 赤羽寛之・狩野貴洋・蜂谷龍人・栃木県立宇都宮工業高校2年
「簡易スロープ付き車いす」
= 佐藤菜摘・日本福祉大学付属高校3年
- ▽特別賞
「さあ! Let's ウォーキング」
= 永谷美江・愛知県立鶴城丘高校2年

■大賞の「伸縮するつり革」(左)と「つまみ付きスケール」



Easy Pick



ビス”の工夫」を募集しました。

全国各地から多くの高校生からの応募があり、特定課題に131件、自由課題に371件の合計502件の力作が送られてきました。予備審査を通過した特定課題53件、自由課題66件を本審査委員会で審査し、別表のように、各課題ごとに最優秀賞1件、優秀賞2件、特別賞1件の計8件を決定しました。この8件は、着眼点・独創性・アイデアの実現可能性に特に秀でていと判断されたものです。

今後もこのアイデアコンテストを継続し、若い人たちがアイデアを公表する機会を提供していきたいと考えています。(鳥居恭宜)

■福祉機器アイデアコンテストのHP
<http://www.n-fukushi.ac.jp/fkidea>

韓国UDリサーチセンター第2回UDコンペ 「伸縮するつり革」が大賞を受賞

釜山にある慶星大学の李教授(Prof. Hosong Lee)が、「韓国でユニバーサルデザイン(UD)を広めたい」と共用品推進機構を訪ねてこられてから4年。来所後1年で、韓国政府からの委託を受け、同大学内にユニバーサルデザインリサーチセンター(UDRC)を設立し、その後UD・アクセシブルデザイン(AD)製品の展示室、各種研究・調査事業を立ち上げられた。

そして2005年、UDRCは韓国国内のデザイン学生に向けた「第1回UDコンペ」を企画・実施。160点ほどの応募された作品を、日本

から参加した鴨志田厚子理事長、静岡文化芸術大学の三好泉教授を含む5名で審査し、本誌40号で紹介したように「手をつけずに食べられるナプキン」が大賞となった。

2回目の今年度は260点の応募があり、12月8日に慶星大学で審査が行われた。審査は、韓国から3名(企業1名、大学教授2名)、日本から2名(名古屋学芸大学の河村暢夫教授と星川)の計5名で行われ、①公平性、②使用性、③理解性、④生産性、⑤環境性、⑥審美性——を念頭におきながら、第一次、第二次、第三次と進み、入選20点、うち大賞1点、各賞4点が選出された。

大賞は「伸縮するつり革」。各賞には「つまみ付きのスケール」「垂直に穴を空けられるドリル」などが選出された。作品の応募はA2判のパネルで最大2枚までという制約があったが、作品のレベルの高さに圧倒された。

作品の授賞式は12月21日、釜山市役所国際会議室で行われた。作品は会場内のホールに貼り出され、多くの作品の表現力の豊かさに参加者からの感心が寄せられた。授賞式の後、慶星大学と釜山市の共催で「2006ユニバーサルデザイン招待講演会」と題して、日本から招かれたタカラトミーの高橋玲子さん、静岡県UD室の萩原綾子さん、大日本印刷UD企画室の古田晴子さんがそれぞれの分野の取り組みについて講演を行い、大きな関心と反響があったと後日、李さんから嬉しい報告をいただいた。(星川安之)

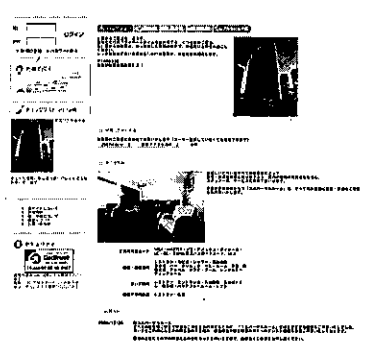
<この業界・この団体> (社)全国脊髄損傷者連合会 (全脊連) 「インターネット版宿泊ガイド」の運用開始

脊髄損傷者ならびに重度障害者の社会復帰と自立を目指して1959年に発足し、2002年に社団法人化した。全国都道府県に支部を持ち、登録会員数は約5000人。「脊損ニュース」の発行など情報提供、制度改革に向けた関係省庁への請願などの活動を展開している。

近年特に力を入れているのが、脊髄損傷者が社会に積極的に出て行くための支援活動。その1つが「ピアマネジャー養成研修事業」。交通事故などで重度障害になってしまった人を同じ障害のある仲間が「ピアマネジャー」となってサポート。病院や施設・家庭を訪問しながら、不安や悩みを一緒に解決して社会復帰の手助けをする制度だ。2004～06年度の3カ年事業で研修を実施、168人が修了し、第1期生として活動を開始している。

専用サイトから直接、予約が可能に

さらに、今年2月から「インターネット版全国車いす宿泊ガイド」(<http://www.raqoo.jp/sij/>)の運用を始める。これまで同様のタイトルの出版物を5年に1度発行してきたが、インターネットの普及を受けて、オンライン予約サービス会社・キロックス(東京・品川)の協力を得て、誰でも自由に利用でき、しかもその場で予約ができる専門ウェブサイトの



●2月から本格運用する「インターネット版全国車いす宿泊ガイド」の画面例

■(社)全国脊髄損傷者連合会

設立 1959年10月
理事長 妻屋 明(つまや・あきら)氏
本部 〒134-0085 東京都江戸川区南葛西5-13-6
問い合わせ先 TEL: 03-5605-0871 FAX: 03-5605-0872
ホームページ <http://www.zensekiren.jp/>

開設に踏み切った。すでに昨年11月から約70軒のホテルが参加して試験運用を始めており、2月2日には京王プラザホテルでマスコミなどを招いて正式発表し、本格運用に入る。サイトへの登録料は無料。全脊連によると、バリアフリールームを持つホテルは全国に約1000軒あるといい、「多くの宿泊施設に参加を呼び掛けたい」としている。

たかしまたけお
(高嶋健夫)



<アクセシブルデザインの普及に向けて一言> 社会の各層との連携強化で「社会に出る活動」を展開

妻屋 明・(社)全国脊髄損傷者連合会理事長

2002年の社団法人化を契機に、全脊連は私たち自身が社会に貢献する、存在意義のある団体に脱皮することを目指して活動の幅を広げる努力を続けている。「インターネット版全国車いす宿泊ガイド」の開設はその一環で、民間企業とのコラボレーションによって実現することができたことは大きな喜びだ。

同様に、民間の自動車教習所紹介サー

ビス企業と提携して、車いす使用者が利用できる教習所や宿泊施設、移送サービスなどを紹介・斡旋する「運転免許取得サポート事業」も始めている。今後も、行政、企業、共用品推進機構など専門機関との連携を強め、脊髄損傷者も、全脊連も「積極的に社会に出て行く」活動を展開していきたいと考えている。

(談)

随想 第25回 「男坂」「女坂」に見る、わが国バリアフリーの伝統 私と共用品 岩佐 徳太郎 (財)交通エコロジー・モビリティ財団バリアフリー推進部長

わが国の神社仏閣には、男坂(急な坂道または階段)、女坂(緩やかな坂道)というものがある。急な階段の横には緩やかな坂道、また信仰として崇められる山にも男道、女道、あるいは急な登り下りが嫌な人にはまき道がある。男、女の名前の善し悪しには異論のあるものの、以前からわが国にはユニバーサルデザインらしき思想はあったのである。

近年、ユニバーサルデザイン、バリアフリーデザインが注目され、その対策に追われているが、古代の人は「なぜ、今頃？」と嘲笑しているかも知れない。

忘れ去られた「奉仕互助」の精神

バリアフリー対策の問題点として社会のモラルの欠如があげられる。バリアフリーは、物理的な障壁の除去だけではない。国民の高齢者、障害者に対する理解がなければバリアフリー化は進まないのである。

わが国は戦後、経済復興に力点が置かれ、経済主導で社会生活が動いてきた。このため、社会全体が競争の世界となり、相手に対する思いやりが希薄となり、自分さえ良ければという考えが浸透した。困った人を見かけたとき、話しかけたり、協力をし合ったりする、いわゆる手を差し伸べる光景を見なくなった。

要するに、お互いが助け合いの精神のもと、献身的に社会に尽くすという「奉仕互助」が忘れ去られてきたのである。

このような中、わが国は急速な高齢社会に突入し、高齢者、障害者の社会参加対策が喫緊の課題となり、バリアフリー推進の重要性が増したのである。

そして、国は2000年5月、交通バリアフリー法を制定(施行は同年11月)し、さらに

2006年6月、従来の交通バリアフリー法を見直し、建築のハードビル法と統合し、まちづくりを一体的に総合的にバリアフリー化する



「高齢者、障害者等の移動の円滑化の促進に関する法律(バリアフリー新法)」を公布した(同年12月20日施行)。

その中にはユニバーサルデザインの考えを盛り込み、「どこでも、だれでも、自由に、使いやすく」という考え方のもと、利用者を区別しないという「公平」、個々のニーズに柔軟に対応する「選択可能」、さらに利用者や住民の「参加」の下での計画策定など、様々な利用者ニーズに対応することと、多様な関係者の連携・協働が必要であるとしている。

子供たちに残したい「心のバリアフリー」

公共交通機関のバリアフリーは単に高齢者、障害者を特別に対象としているわけではなく、誰もが利用しやすいものでなければならない。また、利用者(当事者)のニーズを的確に反映しなければならないのである。

このようにバリアフリーは、時代の要請を受けて、特別なものから普遍性のあるものに進化している。

そして、ハード面の整備のほか、「心のバリアフリー」の重要性を認識し、奉仕互助の精神を培うような仕組みを構成し、次代を担う子供たちに心の通ったバリアフリーを残しておかなければならないのである。

なかのなつみ
(題字は中野奈津美・財)共用品推進機構運営委員)

「平成18年度バリアフリー化推進功労者表彰」 コクヨが「内閣総理大臣表彰」を受賞

内閣府は「平成18年度バリアフリー化推進功労者表彰」の受賞者を決定し、12月7日に表彰式を行った。この表彰は、高齢者、障害者を含むすべての人が安全で快適な社会生活を送ることができるよう、ハード面、ソフト面を含めた社会全体のバリアフリー化を効果的、総合的に推進する観点から、その推進について顕著な功績または功労のあった企業・団体などを表彰するもの。

第5回目の今年度は内閣総理大臣表彰を、(財)共用品推進機構の法人賛助会員であるコクヨ(株)が受賞。内閣府特命担当大臣表彰は、ケア付き青森ねぶた「じょっぱり隊」、京王電鉄(株)、公立豊岡病院組合、特定非営利活動法人シーエス障害者放送統一機構、とっておきの音楽祭実行委員会 SEND、富山ライト

レール(株)、平田観光(株)、THE MAGICAL TOY BOXの8件が受賞した。

コクヨの受賞理由は、約800品番のユニバーサルデザイン商品の開発・販売をしていること、公平性、柔軟性、身体負担の軽減などのチェック項目を設け、使いやすく安全な製品の提供に務めていること、およびユニバーサルデザインの啓発・普及活動を行っている点が、バリアフリー化社会の構築に大きく貢献したものと評価された。



■高市早苗内閣府特命担当大臣から内閣総理大臣表彰を受ける黒田章裕コクヨ社長(昨年12月7日、総理大臣官邸大ホールにて)

わたなべあやこ
(渡辺文子)

「次世代福祉・生活支援コーディネータ研修会」を京都で開催

日本福祉用具・生活支援用具協会(JASU-PA)、(財)共用品推進機構などの主催による「次世代福祉・生活支援コーディネータ・テキスト研修会」が12月4～5日の2日間、京都・中堂寺の京都リサーチパークで開催された。

これは福祉用具や共用品(加齢等配慮製品)の開発・事業化を促進する専門人材=コーディネーターを育成する目的で、経済産業省の委託事業として2005年度に作成した研修用テキストのブラッシュアップを図る狙いで開催したもの。主に関西地区から約100人の受講者が集まり、2日間全17コマに及ぶ講義に熱心に耳を傾けた。

研修会の初日は、山内繁・早大人間科学

学院教授による総論に始まり、京極政宏・(財)日本システム開発研究所副主任研究員、星川安之・(財)共用品推進機構専務理事らが、市場動向、標準化の動向、ニーズ把握の方法、販路開拓の課題、プロモーション戦略の動向などについて講義。2日目は、TOTO、竹虎ヒューマンケア、コクヨS&T、三重県科学技術振興センター、アーバン・ダイナミックスなどの事例報告が行われた。

なお、関東地区の同研修会は1月30～31日の両日、東京・亀戸の「アンフェリシオン」で開催される。

■ホームページ

<http://www.nporyueikai.org/kantou/info.html>

「第4回アクセシブルデザイン・フォーラム」を開催

アクセシブルデザイン推進協議会(旧アクセシブル・デザイン・フォーラム)主催による「第4回アクセシブルデザイン・フォーラム」が12月20日、(財)共用品推進機構事務局で開催された=写真。

今年度から、共用品推進機構が事務局役となって継続開催することになったもので、当日は同推進協議会に参加している約30団体のほか、民間企業などからの参加者も加え、約50人が参加した。

今回は、まず相澤幸一・経済産業省環境生活標準化推進室長が「日本が先導する国際舞台でのアクセシブルデザイン標準化」と題して、日本から国際標準化機構(ISO)への新規5テーマの提案の経緯や現状などについて報告した。

続いて、佐川賢・独立行政法人産業技術総合研究所人間福祉医工学研究部門アクセシブルデザイン研究グループ長が「ISO/IECガイド71を提案した日本が次にやるべきこと」と題して、今春制定予定の人間特性データ集「ISO TR 22411」の作成過程と今後の浸透ビジョンなどについて講演した。

なお、同協議会では今後、年数回のペースで同様の講演・交流会を開催していく計画だ。
たかしまたけお
(高嶋健夫)



「さわってわかる歯みがきの本」 第3弾の「歯周病編」を発行

ライオンはこのほど、ユニバーサルデザイン健康読本「さわってわかる歯みがきの本」の第3弾となる「歯周病編」=写真=を発行した。これは、視覚に障害のある子供や保護者、歯科医師や歯科衛生士、盲学校や養護学校の先生らに、正しい歯みがきの仕方や口腔ケアに対する知識を持ってもらおうという目的でシリーズ化しているもので、すでに全国の盲学校や点字図書館などに寄贈したほか、希望者にも無料で提供している。

「さわってわかる歯みがきの本」は同社のお客様相談室、広報部、(財)ライオン歯科衛生研究所による社内横断チームが担当して製作しているもので、第1弾は04年11月8日の「いい歯の日」に発行。歯の働き、乳歯と永久歯の生え方、虫歯や歯周病などの基本知識をまとめた第1部、歯の磨き方や歯ブラシの種類などを解説した第2部の二分冊になっている。続いて、05年6月4日の「虫歯予防デー」には第2弾の「口臭編」を、今回の

「歯周病編」を昨年11月8日にそれぞれ発行した。
いずれもB5変形判・12ページ建て。22ポイント・ゴシック体の墨字と点字が重ねて印刷され、歯並び、歯ブラシの形などのイラストは指でなぞれる浮き彫りの触図になっている。また、指を傷つける心配のないように、製本には金具を使わない「折り製本」を採用している。印刷は大日本印刷、製本はNPO法人・ユニバーサルデザイン絵本センターが全面協力している。

たかしまたけお
(高嶋健夫)

■ライオン(株)のホームページ

<http://www.lion.co.jp/>

■「さわってわかる歯みがきの本」の問い合わせ先は同社お客様相談室(担当:平塚氏、電話:03-3621-6611、Eメール:hidetuka@lion.co.jp)



「共用品の普及と新聞報道」

後藤芳一 (共用品推進機構運営委員、日本福祉大学客員教授)

共用品^{③⑥⑩⑬⑭⑮⑰⑱⑲} (小さい添え字^{①②③④}は、同様の用語が本講の第1～44講に既出であることを示す)の普及の様子を、メディアによる報道から考える。用語が報道に登場する頻度は、その時点で、社会の関心の程度や、報道素材としての新鮮さを反映すると考えられる。新聞記事に現れた頻度から、共用品の動向を考える。

1. 新語の導入時は富士山型 (基本法則1)

新しい用語は、普及するとともに登場頻度が増し、頂点を過ぎると急減する。グラフにすると、富士山のような形になる。頂点は、制度の導入などの節目の時点に重なることもある。出る頻度が減っていても、普及と定着は進んでいることも多い。

例えば、「介護保険^{⑩⑪⑫}」の頻度は、1999年と2000年が頂点。00年4月に導入された介護保険制度の、準備と開始の時期に重なる。

頂点の時点を探ることで、その用語に対する、社会の関心の変化を把握できる。「点字^{⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲}」「福祉用具 (福祉機器を含む)^{⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲}」は、ともに00年が頂点。伝統的な福祉用具は、この時期に関心が広がった。「福祉車両^{㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}」は、03年と05年に頂点がきている。

2. 類似語の追加で八ヶ岳型 (基本法則2)

伝統的な用語に、新しい用語が加わることで、細かく使い分けられるようになることもある。この結果、既存の語の出現頻度は、複雑な動きになる。

身体障害者^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲}を支える犬の用語が、その例である。「盲導犬^{㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}」が一般的であったが、その後、「聴導犬」「介助犬」「補助犬」も用いられるようになった。これらの用語を合わせて、経時変化をみると、1999年と2002年に頂点がある。

個別にみると、「補助犬」は01年に初めて登場し、03年が頂点だった。02年10月に「身体障害者補助犬法」が施行されたことと重なる。「聴導犬」も03年が頂点。「盲導犬」は99年と02～04年が高い。TVドラマなどに登場して、折にふれて話題になる。「介助犬」は02年が頂点。頻度を量的に比べると、盲導犬が終始、圧倒的

に多く、最近では、補助犬が介助犬に肩をならべつつある。総じていえば、盲導犬は頭数が多く、イメージしやすいために頻度が高く、残りの用語は、普及する前に低下が進んでいる。

3. 共用品をめぐる動き

「共用品」に関わりの深い用語の代表として、「バリアフリー (BF)^{③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲}」と「ユニバーサルデザイン (UD)^{③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲}」がある。これら3つの語を通じて、共用品をめぐる報道の動向を考える。

3つの語を合わせた経時変化は、2001年が頂点だった。量では圧倒的にBFが多いので、3語の合計もその動向に沿う動きだった。「BF」は01年が頂点で、近年はその半分の水準にある。「共用品」は00年が頂点。「UD」は02～06年は一進一退である。BFや共用品は、着実に普及したことを反映すると考えられる。UDは00年頃から増えたものの、伸びはほぼ止まっている。BFとUDの関係は、盲導犬と介助犬の関係に似ている。

4. 媒体別に用語使用の特性 (基本法則3)

メディアの側にも、用語の用い方に、媒体ごとに特徴がある。

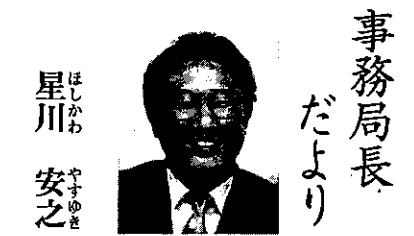
(1) 用語の選好

主要4紙別に、「BF」と「UD」をどのような比率 (媒体ごとのBFの頻度を、同じ媒体のUDの頻度で割る) で用いるかを比べる。1999～2001年では、BFの比率の高い順に、毎日>産経>読売>朝日の順だったが、04～06年には朝日>毎日>読売>産経となった。04～06年の朝日は、毎日と読売より、BFのUDに対する割合が特別に高い**。

(2) 経時変化のパターン

BFとUDの各語が登場する頻度の経時変化は、4紙で相互に強い相関**があった。そのうち、BFの頻度の変化は、朝日と毎日が近い動きを示しており、UDでは、読売と毎日が近い動きを示す。
(注：調査は、ニフティの新聞・雑誌記事横断検索を用い、朝日、読売、毎日、産経の4紙の1995～2006年を調べた。文中の「**」は、1%有意。)

2007年は「再発進の年」に！
岸田今日子さんの思い出を胸に刻んで



星川 安之 事務局 長 だより

☆…共用品推進機構にとって、昨年2006年は2つのテーマをもった年であった。

1つ目は、フォーメーションの見直し。1999年の発足から2005年までの7年間、後ろを振り返ることをせずに無我夢中で進んできた。そのため、「成果のあがったモノ・コト」、「成果がいま一つだったモノ・コト」、どちらの整理もしっかりとはつけずに突き進んできてしまったきらいもある。

そこで、2006年は新規事業テーマに取り組みつつも、思い切って、今までの事業を客観的に見直すことを心がけてみた。

☆…振り返り収めの昨年12月17日、女優の岸田今日子さんがご病気で亡くなられたという悲しい知らせを受け取った。

私の母校、自由学園の先輩である岸田さんは、共用品推進機構が花王㈱と共同で企画・制作したバリアフ

リービデオ『雅士くんの一学期』『みんなで跳んだ』の2本に「声優」として参加してくださった。

後輩といっても一面識もない私からのお願いを快く引き受けてくださり、大が付く女優さんであるにもかかわらず録音当日、録音会場まで1人でバスでやって来られた。

そして、いざ録音が始まると、こちらが気づかない細かな表現も優しく指摘してくださった。岸田さんがマイクに向かい、その声が発せられた時の空気に、それまで味わったことのない感動を覚えたのを、つい昨日のことのように思い出す。

振り返ってみると、岸田さんだけに限らず、何と大勢の人たちに支えられて、共用品推進機構が成り立ってきたことかを、改めて思い知らされる。感謝し尽くせない気持ちでいっぱいだ。

☆…2006年のもう1つのテーマは「準備の年」であった。

2005年の愛知万博で実践したバリアフリーサービスの成果を、次回の上海万博以降につなげていくための準備。

本号で詳細を報告している2種類の日本工業規格 (公共トイレ操作部の配置と触知案内図) を制定するための準備。

共用品・アクセシブルデザイン (AD) に関する配慮点の標準化体系図作成のための準備と、製品などのモニターを行うシステム作りのための実践を通じた準備。

よりわかりやすく共用品・AD製品を伝えるための展示方法を実現するための準備——などである。

さて、2007年。今年も多くの方々へ感謝しながら、こうして準備したものを1つひとつ、心を込めて「発進」させる年にしていこうと、思っている。 (★)

共用品通信

- 【共用品推進機構の動き】
- 第2回アジアにおける高齢者・障害者配慮標準化委員会 (11月6日)
 - 第3回アクセシブルデザイン社会ニーズ検討委員会 (11月28日)
 - 第3回アクセシブルデザイン協議会 (フォーラム) 幹事会 (11月28日)
 - 第2回アクセシブルデザイン・ミーティングWG (11月29日)
 - 第2回サービス産業人材育成事業「加齢等配慮委員会」 (12月15日)
 - コーディネーター育成事業・関西地区テキスト研修会 (12月4、5日、京都リサーチパーク) 【講演】
 - ASEAN国際標準開発研修 (11月16日、12月14日、機構事務局) ASEAN加盟国からの研修生にアクセシブルデザインとその標準化について講義 (金丸)。
 - 人権啓発指導者養成講座 (11月29日、千葉県庁) 千葉県職員を対象とした共用品・アクセシブルデザインに関する講座 (星川)。
 - 障害者と社会をつなぐシンポジウム (12月8日、大阪・梅田スカイホール) 内閣府など主催。第Ⅲ分科会「いつも誰もが使いやすい

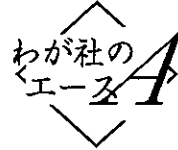
- いUDサービス」のコーディネーターを高嶋が担当。
- 【展示会】
- 久我山盲学校共用品展示会 (11月17日、渡辺・小泉)
- 【海外調査】
- アクセシブルデザイン技術標準化開発事業 (11月13～17日) 米国のDPI (障害者インターナショナル) とRI (リハビリテーションインターナショナル) を訪問 (森川)。

<訂正とお詫び>

前号p7のコーポレーションパルスターの記事中、広島国際大学の坊岡正之助教授のお名前を誤記してしまいました。謹んでお詫びし、訂正いたします。

<読者の皆様へのお願い>

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。



「(株)サン工芸「トイレ用点字案内板」

指に優しいプレス一体加工の点字表示

視認しやすさも追求

サン工芸は、1975年に第1号の点字案内板を京都市役所に設置した、わが国のパイオニア的企業だ。これまでに京都市営地下鉄、神戸市営地下鉄をはじめ、全国の交通機関、公共施設、商業施設などにさまざまなタイプの点字サインを納入している。

「トイレ用点字案内板」は主力商品の1つ。最大の特徴は「読みやすい点字」へのこだわりだ。凸点の出方が良く、耐久性に優れたアルミ板を用い、プレス一体成型で指先の負担が少なく、触読しやすい点字を実現している。

共用品としての案内図作りにも心を配っている。弱視の人や色覚特性のある人でも読みやすいように、コントラストのはっきりした色遣い、読みやすいゴシック体による文字表示を採用している。

「触知案内図のJIS」が今年度内に制定される運びだが、同社の「トイレ用点字案内板」はすでに同規格に対応しており、全国の公共交通機関、官公庁、ショッピングセンターなど50カ所以上から新規受注しているという。

このほかにも、さまざまなタイプの点字案内板（触知案内板）や、手すりに巻き付けて設置する「手すり用点字標示板」などがある。
(高嶋健夫)



■サン工芸「トイレ用点字案内板」 (TS-300-A)

▽発売時期：2006年9月
▽寸法：基盤（アルミフレーム）
300×300×2mm、画面（アルミ板）
290×290×0.5mm
▽印刷：SRフルカラー印刷

▽加工：プレス一体加工
▽定価：別途相談
▽問い合わせ先：(株)サン工芸点字
事業部 (TEL: 0774-23-1133)
▽ホームページ
<http://www.sunkogei.co.jp/>

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第46号

2007 (平成19) 年1月25日発行
"Incl." vol.8 no.46

©The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2007

隔月刊、奇数月に発行
一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、
購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご
利用できない方にはTXTファイルのフ
ロッピーディスクを提供しています。
必要のある方は、事務局までお申し出
ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子
事務局 星川 安之
森川 美和
金丸 淳子
水野由紀子
渡辺 文子
編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 岩佐徳太郎
(五十音順) 後藤 芳一
関戸 菜美
戸村哲次郎
鳥居 恭宜
和田 勉
山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者や
このままの形では利用できない方々のため
に、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複
写することを承認いたします。その場合は、
(財)共用品推進機構までご連絡ください。
上記以外の目的で、無断で複写複製す
ることは著作権者の権利侵害になります。



古紙配合率100%再生紙を使用しています